

2013 年度秋学期 卒業プロジェクト 2

スポーツメディア比較

——日本、イギリスのサッカー新聞報道に焦点を当てて——

環境情報学部 4 年
学籍番号 : 71041748
ログイン名 : t10174ro
太田 遼介

目次

1. テーマの概要・問題提起	p.2-3
2. 先行研究	p.4-7
3. 仮説	p.7-8
4. 研究方法	p.8-11
4.1 研究対象	p.8-9
4.2 研究手法	p.9-11
4.2.1 テキスト分析（カテゴライズ分析）	p.9-11
4.2.2 テキスト分析（イメージ分析）	p.11
5. 分析結果	p.12-27
5.1 2010年南アフリカワールドカップの概要	p.12
5.2 テキスト分析	p.13-27
5.2.1 カテゴリー分析	p.13-21
5.2.2 イメージ分析	p.21-27
6. 考察	p.28-29
7. 今後の展望	p.29
8. 参考文献	p.30
9. 添付資料	p.31-64

1. テーマの概要・問題提起

本研究は、テーマ「スポーツメディア比較 —— 日本、イギリスのサッカー新聞報道に焦点を当てて」のもと、イギリスと日本のサッカー試合に関連する報道、特に新聞報道に着目して、両者を比較・検討するものである。

中村（1995）によると、「スポーツはメディアによって、質の面でも、量の面でも大きく影響を受けてきた。特に新聞は、スポーツに関する情報を多く提供してきた媒体の一つである。しかし、日本の新聞では試合結果とは別に、スポーツが人間ドラマによって扱われ、祭りの性格の強い素材や、読者にとって面白く見られるものが選ばれているのだ」¹とスポーツ報道に関して、海外と日本では異なる点を指摘している。

特に本研究のテーマとして考察の対象とするサッカー試合関連の報道に関しても、日本ではまだまだ分析的視点が向けられているとは言い難く、日本におけるサッカー全体の正当な位置づけにメディア報道が貢献しているとは言えないのではないかと。とりわけ欧州のサッカー試合関連を扱う報道では、ミスプレイをおこなった選手や監督に対して非常にクリティカルな表現²を伴う記事が報道され、その一方で素晴らしいプレイをおこなった選手に対しては、大きな称賛が表現として書かれる。そこには単に感情的な批判や称賛が記述されるのではなく、それぞれのメディア記者の分析的な視点が見られる。この点が、日本におけるスポーツ記事のあり方とは全く異なる部分であろう。

本研究の中で取り上げたイギリスの大衆紙 The Times³においても、2010年の南アフリカワールドカップ決勝⁴の試合に関して、「As a spectacle, it was gruesome, the ugliest of all World Cup finals, but on a night when the good name of Dutch football was besmirched by a display of thuggery, justice was done with four minutes remaining in extra time as Andres Iniesta secured a much-needed victory for the sport as well as a joyous Spanish nation.」（見せ物として、すべてのワールドカップ決勝の中で最もすさまじく醜いものであったが、オランダサッカーの名が暴力プレイによって汚された夜、スペイン国家の歓喜と同じようにスポーツにとって非常に必要とされた勝利をアンドレ・イニエスタが守ったロスタイム4分間によって、

¹ 中村 敏雄『スポーツ文化論シリーズ④ スポーツメディアの見方、考え方』（有限会社創文企画 1995年7月）より引用。

² クリティカル表現の定義については、p.9～10に後述。

³ 『The Times』1785年創刊。最も英国的な一般紙。発行部数は60万部。

⁴ 2010年6月11日から7月11日にかけて、南アフリカで開催された第19回目のFIFAワールドカップ。詳しくはp.12参照

正義は保たれた。) ⁵と述べられている。また、The Guardian⁶においても、「systems were strangling the match – particularly the system of defence devised by Bert van Marwijk. Even there it was possible to admire, in a detached kind of way,” the intensity with which the Dutchmen flew into their interceptions. Defending well is as much a part of the game as scoring goals, but if ever there was a final to lend credibility to the concept of anti-football, this was it.」(システムは試合を押さえつけた。特にファンマルバイクによって組織されたディフェンスのシステムである。強烈さをもって、インターセプトに集中する、孤立したような方法は称賛される可能性もあったかもしれない。良いディフェンスはゴールを奪うことと同様に試合の重要な部分を占めるが、それはもしアンチフットボールの考え方に信頼を与える決勝であったならばの話である。) ⁷と述べられている。イギリスの両新聞では、ワールドカップ決勝という全世界が注目する試合において、終始守備的なプレイに徹し、暴力的なプレイを再三見せ、フェアプレイ精神を揺るがしたオランダの選手達への痛烈な批判や華麗なパスサッカーを披露したスペインへの称賛が目立っていた。一方日本では、読売新聞⁸において、「決勝にふさわしい素晴らしい試合だった。どちらが勝ってもおかしくなかったし、お互いに自分の国のスタイルを出し合って戦ったところが、やはり W 杯だ」⁹と述べられ、さらに朝日新聞¹⁰では、オランダの決勝でのプレイに関して「伝統の美しいサッカーとはあえて距離をおいた3度目の準優勝。オランダのサッカー界はどう総括するだろう」¹¹と疑問を読者に投げかけていたが、上記の例で挙げたように、イギリスの新聞で目立っていたオランダのプレイに関する否定的な表現はほとんどなかった。スペインの華麗なプレイに関する称賛が中心で、オランダの暴力的なプレイに関する言及は非常に少なかったのだ。

そこで本研究では、日本、イギリスのサッカー試合に関する新聞報道を比較しながら、両国のサッカー試合を扱った報道に関する差異を調査・分析する。その調査・分析結果を踏まえて、それぞれの新聞で使われている表現方法や論調は、その国の文化的背景から起因するものなのかどうか、その点を考察する。両者のサッカー新聞報道の差異を明確化し、スポーツ報道の在り方に関する議論を再考する研究として、本研究を位置付けたい。

⁵ 『The Times』 2010.7.12 ワールドカップ特集第2面 なお本研究の翻訳はすべて筆者による

⁶ 『The Guardian』 1821年創刊。発行部数38万部。

⁷ 『The Guardian』 2010.7.12 スポーツ第2面

⁸ 『読売新聞』 1874年創刊。世界最多の発行部数を誇り、朝刊が約990万部、夕刊が約340万部。

⁹ 『読売新聞』 2010.7.12 夕刊 第8面

¹⁰ 『朝日新聞』 1879年創刊。発行部数は、朝刊が約760万部、夕刊が約280万部。

¹¹ 『朝日新聞』 2010.7.12 夕刊 第7面

2. 先行研究

先行研究として取り上げた文献は、「スポーツ記事にあらわれる主観性--日豪の新聞記事の比較を通して」（今西 2006）¹²である。この論文は、「同一のトピックを扱った二つのスポーツ記事を分析し、書き手がテキストに織り込んだ対人的意味、人物、事象への評価を読み取り、その英文の行間に読み取れる書き手の意図や新聞社のスタンスの相違を把握するものである」と述べており、日本とオーストラリアの新聞記事を比較し、書き手の主観的な表現を分析している。

分析結果として、日本の新聞では、「一貫して客観的な立場で記事を書かれていた」¹³と述べ、一方のオーストラリアの新聞では「客観的観察のみならず、出来事への書き手の評価を巧みにテキストに織り込み、結果、小説のように劇的な印象を与えていた」¹⁴と指摘している。さらに「日本の代表的日刊紙ではスポーツ記事であっても、比較的客観的な`factual report`として書くことが好まれ、オーストラリアでは国民の関心の高いスポーツ記事に関しては、日刊紙でも`freestyle`の記事の方が受け入れられるのかもしれない」¹⁵と指摘している。つまり、日本の新聞報道が事実を伝えることを中心とする客観的報道を好み、オーストラリアの新聞が主観的表現を用いながら、読者に語りかける方法を好んでいることを指摘している。

このような同様のテーマを中心にスポーツ記事を扱い、新聞報道を比較・考察する先行研究は多かった。しかし、具体的な事例を対象に、新聞記事比較を、実際にテキスト分析を通して導く手法を用いた先行研究例は少ない。表現分析をすることで差異を明確化し、そこから異なる文化的・社会的背景に起因要因を見いだすことが本研究の目的である。さらに、東明有美 入口 豊 山科花恵 松原英輝（2003）¹⁶にも取り上げられているように、サッカー報道を扱っている研究は見られるが、本論で対象とする、2010年の南アフリカワールドカップをめぐる各国の報道比較研究は見られない。

先行研究で取り上げた文献に加えて、本研究の分析に類似した研究を以下に挙げる。イギリス、日本のサッカー報道を比較する際には、日本のスポーツメディアの現状や、スポーツメディアがどういった意図で作られているのか、さらにスポーツがどのように扱われているのを、考察する手法として重要な論文であると考えられる。

¹² 今西 恭子「スポーツ記事にあらわれる主観性--日豪の新聞記事の比較を通して--」（時事英語学研究 / 日本時事英語学会 [編] 掲載号 45 p.15~28 2006年9月）より引用

¹³ 同上 (p.23)

¹⁴ 同上

¹⁵ 同上 (p.24)

¹⁶ 東明有美 入口 豊 山科花恵 松原英輝「女子サッカーの日米比較研究 日本女子サッカーの歴史と現状について」(大阪教育大学紀要 第IV部門 第51巻第2号 p.433~451 2003年2月)より引用

中村（1995）によれば、

現代のスポーツメディアは、国民がスポーツについて深く考えることを阻害するという
こと以上に、国民がスポーツライターや記者たち以上にスポーツについても深く考え、ス
ポーツへの批判を強めていくことを「恐れている」ように思われる。それはスポーツにつ
いて「国民とともに考える」という発想を欠き、国民とともにスポーツを発展させていく
という考え方をしないからである。これからのスポーツメディアはこの「国民とともに考
える」という視点を貫くことが大切である。そのためにも、スポーツメディアは庶民の日常
的なスポーツ活動や国際的なスポーツ動向、現代スポーツへのさまざまな提言やスポーツ
研究の成果などを掲載すべきである。スポーツは選手だけのものではなく、また「見る」
だけのものでもなく、「する」ものであると同時に「考える」ものでなければならず、メ
ディアはその素材や評論等を提供しなければならないのだ。¹⁷

とスポーツメディアについての考察を述べている。「日本のメディアや国民がスポーツについて
深く考え、スポーツへの批判を強めていくことを恐れている」こうした日本のスポーツメ
ディアに対して、以下の仮説の中でも記述するのだが、イギリスのスポーツメディアはクリ
ティカルな表現、称賛が非常にストレートに表現されているのではないかと仮説を立てた。
では、そのような差異があると仮定した場合、両者の国民の物事に対する姿勢や考え
方が報道にも表れ、そうした差異が生じるのではないか。そのように考えたため、参
考文献を用い、イギリス、日本それぞれの価値観、考え方を考察する必要性を感じた。

原（2013）は日本人の性質や日本社会の特徴に関する見解を次のように述べている。¹⁸

多くの外国人たちが、日本人は、あまりはっきりした発言をしないのでどんな考
えを持っているかよく分からない人たちだけでも、その大多数の人たちが穏やか
で、結構正直で、古来の伝統文化と優れた最新技術を両立した社会、それも非
常に安定した社会を築いてきている人々であると述べている。何故日本人は
穏やかで安定した社会を築くことが出来たのであろうか。そこには長期間に
渡って「和」の精神が大きな役割を果たしてきているから。「和」とは、和
やかなこと、仲良くすることなどの意である。このように善悪を絶対視
するのではなく、あくまでも相対的なものと捉える考え方こそ日本的思考
の根幹である。人間を超越した「神」によって善悪が絶対的にきめられ
るとする一神教的な思考法と極めて異なっている点である。

¹⁷ 中村 敏雄『スポーツ文化論シリーズ④ スポーツメディアの見方、考え方』（有限会社創文
企画 1995年7月）より引用

¹⁸ 原聰『日本人の価値観：異文化理解の基礎を築く』（かまくら春秋社 p.25～31 2013年2月）
より引用

我々日本人は小さい頃から親に「先生の言う事を良く聞きなさい」「友達と仲良くしなさい」と繰り返し言われ続けてきた。「先生や友人と考えが違っていても、遠慮することなく自分の考えをはっきり伝えなさい」と強調してきた親は多くはない。日本では仲良くすることがとにかくにも優先される。もちろん欧米でも仲良くするようにとのしつけはある。しかし、欧米では、同時に自分の意見をしっかり述べることを教えられる。どちらかというところと自己主張の要素がより重きを置かれている傾向がみられる。他方、日本では自己主張と協和妥協との間のバランスは、協和妥協に大きく傾斜したバランスとなっている。

日本人は自身の考えや意見を世界に向かって打ち出していくこと、発信していくことは苦手である。論理的、概念的に物事を考えるよりも直感的、情緒的に考える傾向が強いことや、また自分の周りの人々との人間関係によって判断するという日本人の人間関係本位主義の性格からして、そもそも自分自身の意見をしっかり持っていないことが根本的原因である。

さらに日本社会の特徴的な傾向として以下のように述べている。¹⁹

日本は空気が支配しやすい社会である。日本社会は自分の判断の余地が無いほど、強い「空気」がその場なり、社会を支配し、自分意見を出すことすらできない状況に陥ってしまいがちなのだ。メディアや新聞でも「空気」は短時間に形成される。絶対的、客観的な理念や規範に基づくものごとを判断するようなことはあまりせず、外発的に動かされやすい日本人はマスコミが作り上げた「空気」に支配されやすいのである。通常、何らかの不都合を起こした人に対して日本社会が求めるのは謝罪である。多くのマスコミ報道が拍車をかける。日本で起こる汚職、事件などに関して、どのテレビチャンネルも同じような報道を行い、批難される当事者は世間にさらされる。事実関係調査とは別に一種のムードが醸し出され「空気」が生まれ、過失の有無はまだ証明されていない場合においてすら、過失の存在が当然視されるまでの至ることもある。一方、米国の新聞やテレビを見て感じるのは、ある（命題 A）が全米を支配しそうになると、必ずといっていいほどこれに対立する（命題 B）が識者やマスコミ自身から提示され、「空気」の形成に「水」を差されることである。

このように、日本的な「和」の性質や日本社会の特徴として「空気」が支配されやすい社会であると原（2013）は紹介している。

次にイギリスの文化的価値観について、T. モリスン、W.A. コナウェイ、G.A. ボーテン

¹⁹ 原聰『日本人の価値観：異文化理解の基礎を築く』（かまくら春秋社 p.49～52 2013年2月）より引用

(1999) は以下のように述べている。²⁰

イギリス人の特徴として、一般に外部からの情報に対して閉鎖的である。議論はするが、容易に考え方を変えない。さらに情報を分析的・抽象的に処理する傾向があり、問題を解決する際には、主観的に判断せず規則や法に従うのだ。また彼らが、是非の判断を下す際の唯一の手がかりは客観的事実にあり、個人の印象や直感は判断材料にはしないのだ。

以上のように紹介され、イギリス人が比較的論理的な思考方法を選択すると指摘している。

もちろんすべての国民に共通する日本的価値観、イギリス的価値観を定義付けすることはできない。一人一人の考え方が千差万別である以上、当然のことである。原(2013)自身も、「日本人の価値観が老若男女、都市と田舎などの間で異なることを考えると、ある特定の文化や価値観をもって、これが日本人の価値観である、と一般化して述べることは容易ではない」²¹と述べている。しかし、日本、イギリスにある程度共通して持たれていると考えられる文化や価値観の調査は、本研究にとって非常に重要な意味をもつものであると考えた。

3. 仮説

日本とイギリスのサッカー試合に関する新聞報道を比較した際、どのような要素や差異が出てくるのか。本研究では、日本の新聞が試合の客観的な記述さらには、選手に対する称賛などが多いのに対して、イギリスの新聞が選手に対する分析や意見を中心に論じるのではないか、という仮説をもとに進める。同時に、そうした違いが生まれる要因として、メディア媒体に対する社会の位置づけ・考え方の違いが関係しているのではないか、という点も考察していきたいと考える。

テキスト分析では、日本、イギリス両国共に、決勝で戦ったスペインとオランダのサッカープレイに関するスタイルに着目するクリティカルな表現が多くなるのではないかと考える。決勝という全世界が注目する試合の質に注目するのは両国の新聞の共通点である。日本、イギリスの相違点としては、ワールドカップ決勝でオランダの選手が暴力的なプレイをおこなったのだが、そうした暴力的プレイに関するクリティカルな表現の割合が日本とイギリスでは異なると考える。オランダの暴力的なプレイに関して否定的な意見を述べ、データを使って分析するのが、イギリスの新聞であり、日本の新聞は、そういったオランダの暴力的なプレイに関する言及が少ないのではないか。クリティカルな表現のイメージに関して、日本の新聞がスペイ

²⁰ T. モリスン/W.A. コナウェイ/G.A. ボーテン著 幾島幸子 訳『世界 60 カ国 比較文化事典』(マクミランランゲージハウス p.124~131 1999年10月)より引用

²¹ 原聰『日本人の価値観：異文化理解の基礎を築く』(かまくら春秋社 p.19~20 2013年2月)より引用

ンの選手の美しいプレイを称賛するプラスイメージ表現が多いのに対して、イギリスの新聞では、オランダの暴力的プレイやアンチフットボールに対して否定的なマイナスイメージを持つクリティカルな表現が多いのではないかと、という仮説が成り立つ。

両者の違いが生まれる一番の理由は、批判的に物事を考える姿勢、つまりクリティカルに物事を考えることが大衆にどれだけ受け入れられるのかが一番のポイントであると考えられる。つまり、本研究を通して国民の物事に対する姿勢や考え方が報道にも表れてくるという視点が明らかになるだろう。

4. 研究方法

本研究は、手法としてプリントメディアである新聞媒体を対象とし、その記事のテキストを、テキストデータとして扱い、後の分析・考察の対象とした。プリントメディアとして保管されていないメディア媒体については、マイクロフィルム媒体を扱い、内容テキストを同様にテキストデータとして変換し、分析をおこなった。

4.1 研究対象

対象としたデータ媒体を特徴毎にまとめたものが、以下の通りである。(表 1)

新聞社	読売新聞	朝日新聞	The Times	The Guardian
発信言語	日本語	日本語	英語	英語
媒体形態	紙媒体	紙媒体	マイクロフィルム	マイクロフィルム
新聞の歴史	1874～現在	1879～現在	1785～現在	1821年～現在
発行部数(引用)	朝刊 約 990 万部 夕刊 約 340 万部 22	朝刊 約 760 万部 夕刊 約 280 万部 23	約 60 万部 ²⁴	約 38 万部 ²⁵
対象期間	2010年7月12日			

²² 読売新聞広告ガイド(<http://adv.yomiuri.co.jp/yomiuri/busu/busu01.html>)

日本 ABC 協会「新聞発行社レポート 半期・普及率」2013年1月～6月平均 参照

²³ 同上

²⁴ 英国で新聞を読むための基礎知識 <http://www.news-digest.co.uk/news/features/567.html> 参照

²⁵ 同上

対象記事	夕刊 1、8、9 17、19 面	夕刊 1、7～9、14 面	2 面 ワールドカップ 特集 1～7、9～ 11 面	1～3 面 スポーツ 1～7 面
------	---------------------	------------------	-------------------------------------	---------------------

表 1:[対象としたメディア媒体]

本研究では日本、イギリスのメディア比較を行うために、新聞によるメディア比較を研究方法とした。上の表 1 にあるように、日本の新聞は、読売新聞、朝日新聞の 2 社を選択し、一方イギリスの新聞は、大衆紙と呼ばれる The Times、The Guardian の 2 社を選択した。これらの新聞の選定理由としては、それぞれの国の発行部数の多い新聞を順に選んだ。

次に 4 つの新聞を比較する際のテーマを 2010 年の 7 月 11 日に行われた南アフリカワールドカップの決勝戦に選定した。記事の期間で言えば、7 月 11 日の決勝戦が行われた直後の記事を分析するため、7 月 12 日の記事を分析対象とする。南アフリカワールドカップ決勝戦を扱った対象記事は、読売新聞は夕刊の 1、8、9、17、19 面、朝日新聞は夕刊の 1、7～9、14 面を対象記事とした。朝刊を扱わなかった理由としては、南アフリカワールドカップの決勝戦が行われた時間が日本時間の深夜 3 時半からであったため、決勝戦に関する記事がほとんど掲載されていなかったからである。イギリスの The Times は 2 面と、ワールドカップ特集ページの 1～7、9～11 面、The Guardian は 1～3 面とスポーツの 1～7 面に南アフリカワールドカップ決勝戦の記事があり、これらすべてを対象記事とした。

4.2 研究手法

4.2.1 テキスト分析（カテゴライズ分析）

テキスト分析は、上記の仮説で述べたように、「日本の新聞が客観的な記述さらには、選手に対する称賛を表現する傾向にあるのに対して、イギリスの新聞が選手に対してクリティカルに評価するのを好む」²⁶という仮説を検証するものである。日本、イギリスの各 4 紙の対象記事をすべて分析し、クリティカルな文章を全て抽出した。今回抽出したクリティカルな文章とは、日本語で翻訳すれば、「批判的な文章」であるのだが、以下の楠見(2011)²⁷の文献を参考にした。

日本語の「批判」は日常語としては、他者の意見、行為、理論、作品、人物自体の正しさ、適切さ、価値などを否定的に評価するときに使っています。そのため「批判」には相手を攻撃するという良くないイメージがあります。そこで「批判的」という言葉を避けて、「ク

²⁶ p.7-8 参照

²⁷ 編者 楠見 孝、子安 増生、道田 泰司 発行者 江草 卓治「批判的思考力を育む 学士力と社会人基盤力の基礎形成」(株式会社有斐閣 p.2 2011年9月)より引用

リティカルシンキング」とカタカナ語が使われることが多く、「批判的思考」の代わりに、「論理的思考」「ロジカルシンキング」といった訳語がよく使われています。「批判的思考」という日本語の学術用語は、論理的で内省的な思考をも含む思考として使い、定着させたいと考えています。すなわち、批判的思考は、相手を攻撃する思考とは限らず、批判的思考の対象は自分自身の思考であること、さらに、相手の考え方や意図に配慮した、協力的な営みであることを述べます。

つまり、今回抽出したクリティカルな文章は、決勝戦の状況を踏まえた上で、分析、あるいは考察したものである。そうしたクリティカルな文章の多くが主観的表現の入っているものである。一方で、ただ単に試合の状況を説明したものやインタビューは、客観的報道とし、クリティカルな文章として扱わなかった。

カテゴリ分析では、抽出したクリティカルな文章を A フェアプレイ、B サッカーの質、C 選手のプレイ、D 選手の個人的動機、E 審判、レフリング、F サポーター、G その他の 7 つのタイプごとに分類した (表 2)。

<p>A タイプ 『フェアプレイ』</p> <p>スポーツにおけるフェアプレイ精神に関して記述しているもの。試合における暴力的プレイや汚いファール、ファールをもらうための演技、相手選手にイエローカードを出させるために、審判を欺く行為など。</p>
<p>B タイプ 『サッカーの質』²⁸</p> <p>サッカーとはどのようにプレイすべきなのかに関する記述。また、勝つためにプレイすべきなのか、それとも観客やテレビ視聴者を意識し、美しいサッカーをするべきなのか。決勝戦に関する評価や試合の質、決勝戦という舞台にふさわしい試合であったのかなどに関して記述しているもの。アンチフットボール²⁹に関する内容。</p>
<p>C タイプ 『選手のプレイ』</p> <p>選手のプレイに関する記述。決勝戦で活躍した選手やその選手のプレイの技術に関する記述。監督の采配技術に関しても C タイプとした。</p>

²⁸ A、B どちらのタイプでもとれるような表現の場合、具体的に「暴力的」というような A タイプを連想させるワードが入っていれば A タイプに、その他は B タイプとして数えた。

²⁹ アンチフットボールに関する明確な定義付けはないが、試合を通じて積極的な攻撃プレイを放棄し、守備的なプレイに徹するプレイを揶揄する表現。カウンターや相手のミスを待つだけの戦法であり、非常に消極的な戦い方を表現する言葉。

<p>D タイプ 『選手の個人的動機』</p> <p>選手のプレイ以外の内容に関する記述。選手の個人的な試合への意気込みなどに言及しているもので、今回の決勝戦の例で言えば、イニエスタ³⁰が決勝ゴールを決めた際に、ユニフォームを脱ぎ、メッセージが書かれた T シャツを見せながら、親友の死を讃えた例が挙げられる。</p>
<p>E タイプ 『審判、レフリング』</p> <p>決勝戦の審判であるハワードウェブ³¹に関する記述。</p>
<p>F タイプ 『サポーター』</p> <p>決勝戦のサポーターに関する記述。</p>
<p>G タイプ 『その他』</p> <p>上記 A～F 以外に関する記述。南アフリカの治安に関するものなど、日本の新聞で言えば、今後の日本代表についての考察など。</p>

表 2 [カテゴライズ分析の分類方法]

この 7 つのタイプに分類されたクリティカルな文章の数を数え、A～G までの割合をそれぞれ計算し、グラフによる分析を行った。

4.2.2 テキスト分析(イメージ分析)

上記のカテゴライズ分析で抽出した文章に関するイメージ分析を行う。抽出したクリティカルな文章が選手やチームを称賛するプラスイメージなのか、あるいは主観的な表現が含まれず、決勝戦のデータや状況を踏まえた上で分析したノーマルイメージなのか、選手、チームに対して否定的な意見や皮肉あるいは考察を述べるマイナスイメージなのか。それぞれの新聞で分析調査を行い、それぞれ 3 つのイメージの文章の数を数えた。文章を数える際の注意点としては、一文中にプラスイメージとマイナスイメージが両方含まれる場合もプラスイメージ、マイナスイメージそれぞれ一つずつカウントした。プラス、ノーマル、マイナスの 3 つのイメージに関して文章を数え、それらの割合を計算し、グラフによる分析を行った。その上で、日本、イギリスの各 4 紙それぞれの新聞社同士の比較とそれを踏まえた日本、イギリス 2 国間の比較を行いたい。

テキスト分析ではカテゴライズ分析、イメージ分析で細かな表現方法の分析を行う。さらに、両者の違いはどこから起因するものなのか、あるいは両者の根本的な違いは何なのかを考察していく。

³⁰ スペイン人選手

³¹ イギリス人審判。南アフリカワールドカップ決勝の主審を担当した。

5. 分析結果

5.1 2010年南アフリカワールドカップの概要³²

南アフリカワールドカップは2010年6月11日から7月11日にかけて、南アフリカで開催された第19回目のFIFAワールドカップである。FIFAワールドカップは各大陸の予選を勝ち抜いたナショナルチームがグループリーグ、決勝トーナメントを戦い、今大会は32のナショナルチームで世界チャンピオンの座を争った。アフリカで初開催となった今大会は、グループリーグで強豪国が新興国相手に破れるという波乱続きの大会となった。そうした波乱が生じた要因として、派手な攻撃より手堅い守りを重視し、堅守のチームが勝ち上がったことが挙げられる。自陣で組織的な守りを固め、ボールを奪ったら素早くカウンター攻撃を行う堅守速攻のスタイルのチームが増え、日本も大会前にパスサッカーから堅守速攻のスタイルへと変更した。その結果日本代表は、非常に厳しかった前評判を覆し、日韓ワールドカップ以来のベスト16という結果を手にしたのだ。また華々しいパスサッカーのイメージが先行していたスペインも決勝まで2失点で非常に粘り強い戦いをしていた。

厳しいグループリーグ、決勝トーナメントを勝ち抜いたスペイン対オランダで、2010年7月11日決勝戦が行われた。イニエスタ、シャビを中心とした華麗なパスワークで攻撃を組み立てるスペインに対して、オランダは、かつて代名詞とされた「華麗で攻撃的なサッカー」とは対極をなす激しい守備で、スペインの攻撃の芽を摘み続け、俊足のロッベンを中心としたカウンター攻撃を行った。互いに譲らず迎えた延長後半11分、イニエスタの豪快なシュートで得点をもぎとったスペインが頂点に立ち、一方のオランダは32年ぶりにたどり着いた3回目の決勝の舞台も準優勝に終わってしまった。両チーム合わせてワールドカップ決勝史上最多の14枚のイエローカードが出され、非常に激しい決勝戦となった。

「アフリカで初開催となった南アフリカワールドカップは、国際社会に大きな影響をもたらした。アフリカで最も民主的統治が進むガーナの快進撃は「内戦や飢餓にあえぐ」といったアフリカのイメージを「力強さ」へと一新、民主政治の進展も印象付けた。ただ、貧困やエイズウイルス（HIV）まん延などの課題には注目が集まらず、置き去りにされた感も否めない。一方、経済危機にあえぐスペインではW杯優勝が国民に起死回生への希望を与えたのだ。」³³

³² 『毎日新聞』 2010.7.12 夕刊 第9面

守備重視のトレンドの中で更に高まる攻撃の重要性

http://sportsnews.blog.ocn.ne.jp/column/others100721_1_1.html

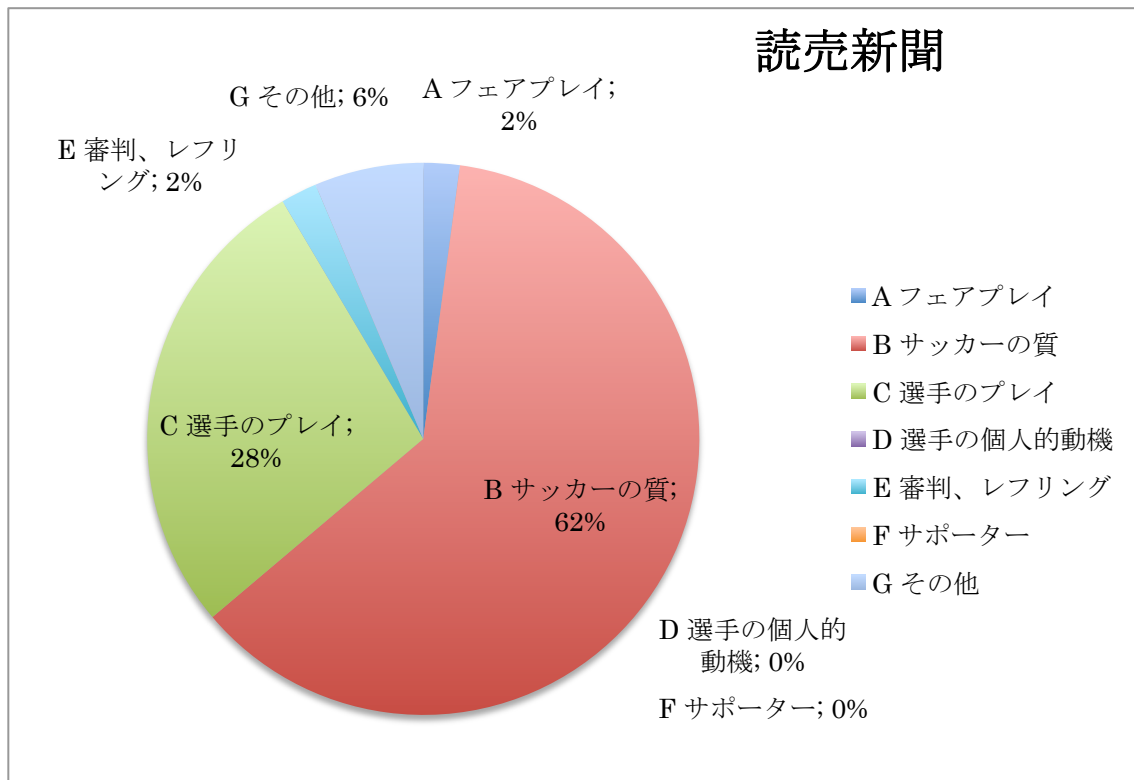
以上2点の参考文献を一部改変し、記述した。

³³ 『毎日新聞』 2010.7.12 夕刊 第11面

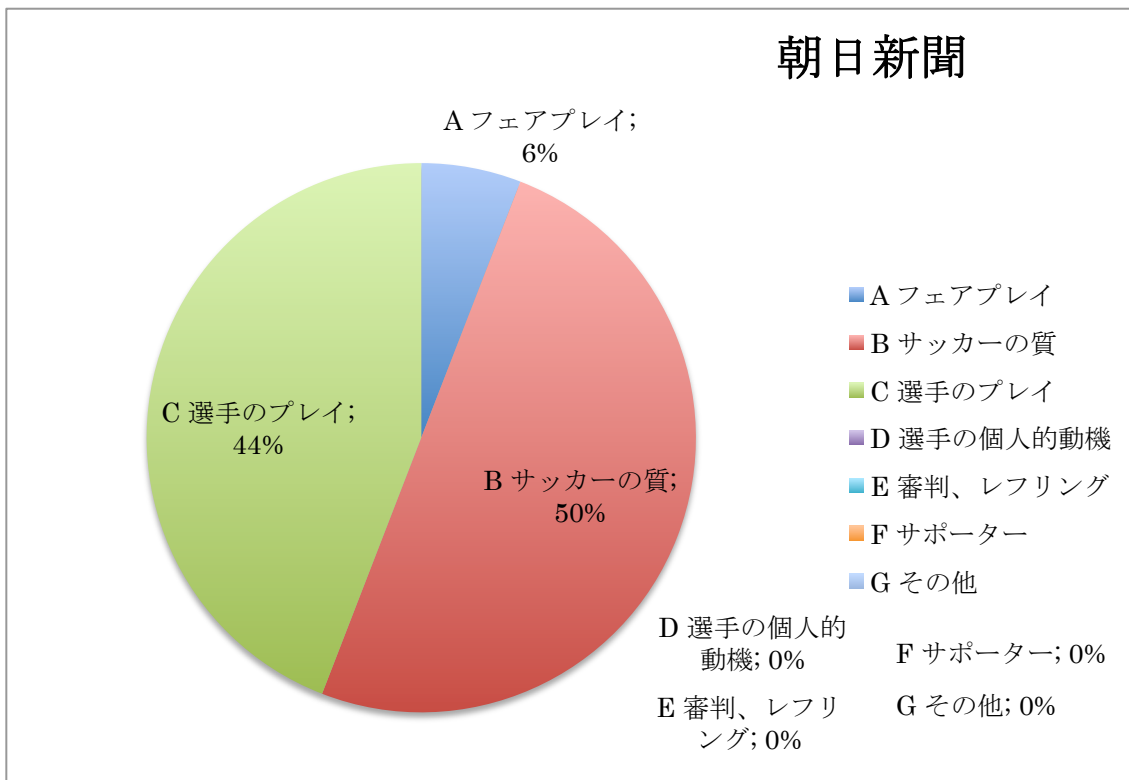
5.2 テキスト分析

5.2.1 カテゴリズ分析

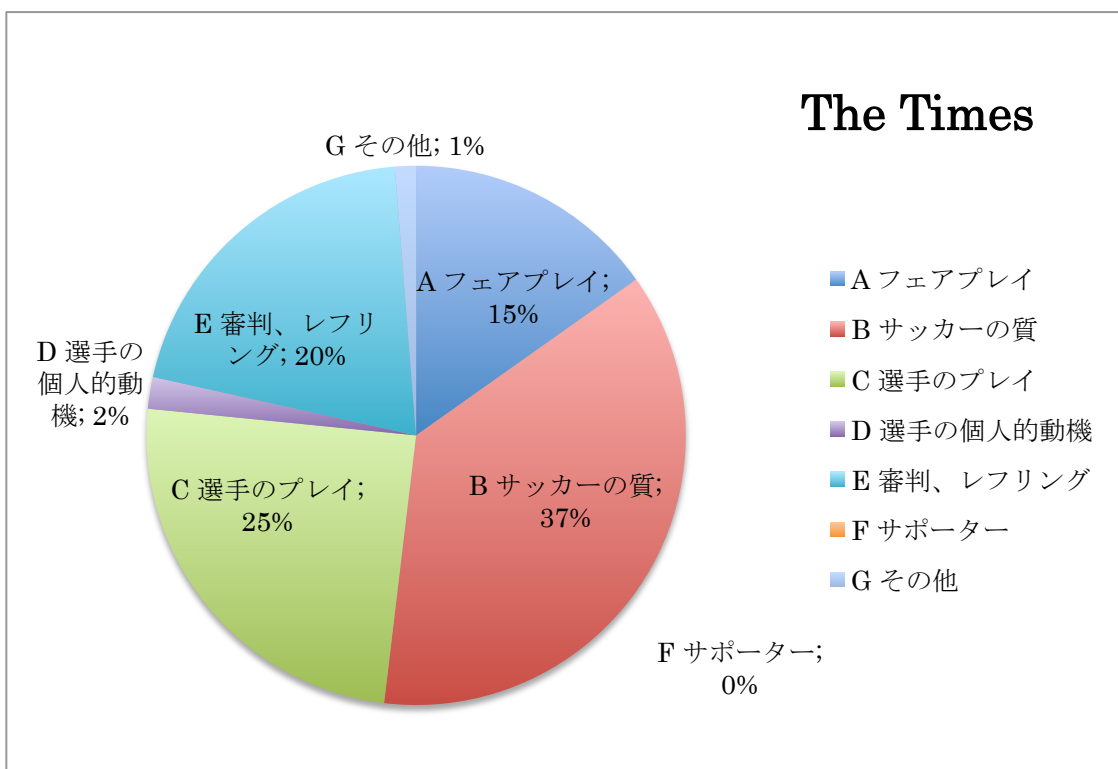
カテゴリズ分析では、対象とする記事のクリティカルな表現が含まれている文章をすべて抽出し、上記表 2 の 7 つの観点からカテゴリズした上で、A～G それぞれのタイプの割合をグラフでまとめた。グラフ 1～4 が読売新聞、朝日新聞、The Times、The Guardian の 4 紙の結果を示したものである。



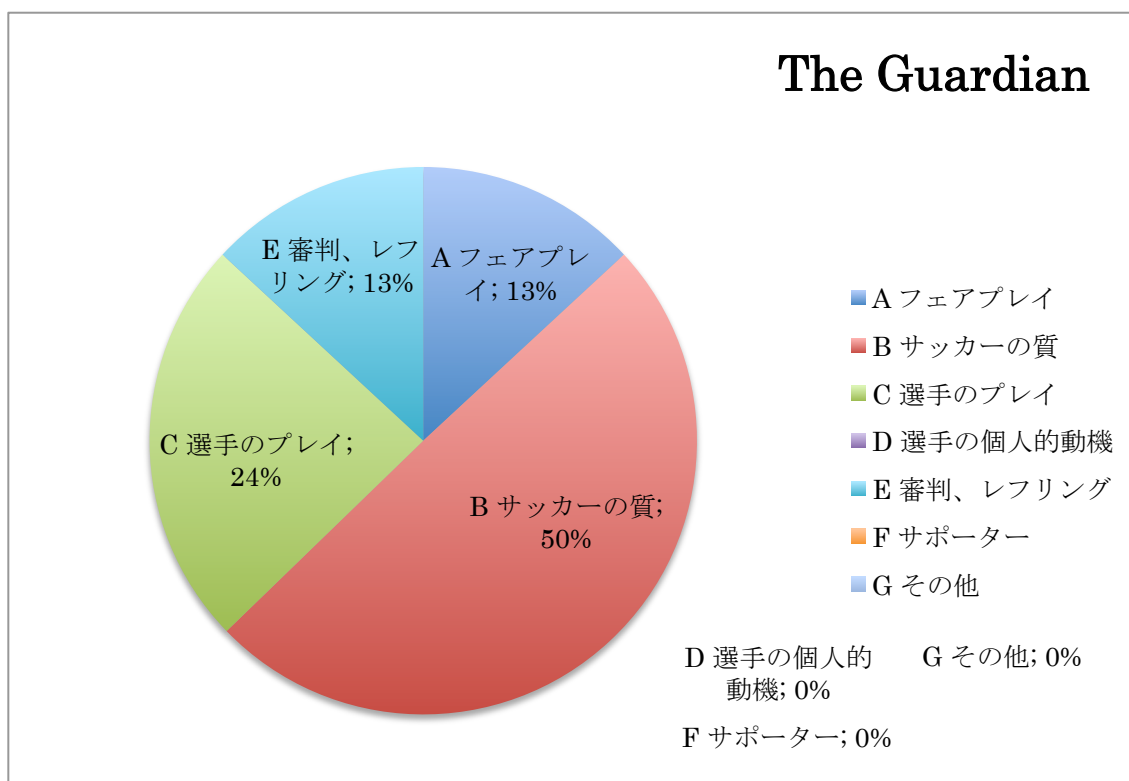
グラフ 1[テキスト分析結果:読売新聞]



グラフ 2 [テキスト分析結果:朝日新聞]



グラフ 3 [テキスト分析結果:The Times]



グラフ 4[テキスト分析結果:The Guardian]

A～G それぞれの項目別に分析を行いたい。A.フェアプレイに関するクリティカルな表現の記述に関しては、読売新聞で 2%、朝日新聞で 6%であるのに対して、The Times で 15%、The Guardian で 13%と日本よりもイギリスの両新聞の方がより多く言及していた（グラフ 1～4 参照）。4 紙それぞれ使われているクリティカルな表現に関して例を挙げると、読売新聞では、決勝戦に関して「美しさ以前に、粗さばかりが目についたのは、チームとしての完成度で劣っていたからに違いない。」³⁴と表現され、B のサッカーの質のタイプにも属すが、この 1 文だけが A.フェアプレイに関して言及されていた。朝日新聞では、「序盤から重ねた警告が最後は退場につながり、完全に流れを失った。」³⁵と言及され、暴力的なプレイがオランダの敗因のひとつであると言及している。

一方イギリスの The Times では「Bert van Marwijk, the Holland coach, appeared a little apologetic when he said that it was “not our style to commit horrible fouls”, but his team’s approach, led by Mark van Bommel and Nigel de Jong, his clogs of war, seemed rather deliberate.」（オランダの監督であるベルト・ファン・マルヴァイクは、ひどいファールを犯す

³⁴ 『読売新聞』 2010.7.12 夕刊 第 9 面

³⁵ 『朝日新聞』 2010.7.12 夕刊 第 9 面

のは我々のスタイルではないと小さな弁明を示したが、彼の戦争の武器である、ファンボメルやデヨングによって率いられた彼のチームの行いは、かなり故意的なものであるように見えた。) ³⁶と言及されている。「戦争の武器」という厳しい皮肉を浴びせ、選手の暴力的な行為に対して否定的な表現を用いている。

The Guardian では、「Holland were already being rebuked prior to the final but these events were on a wholly different scale and Fifa should take additional action considering the harm done to the culmination of a tournament that means so much around the globe. The losers were overwhelmingly the guiltier party, with seven bookings, not including Heitinga's pair.」(オランダはすでに決勝の前に批判されてきたが、決勝という舞台では完全にスケールが異なるし FIFA³⁷は地球全体を意味するトーナメントの最高潮である決勝での暴力行為を考えて、さらなる行動を起こすべきだ。ハイティンガが貰った2枚のカードを含めなくても、7枚のイエローカードをもらっており、敗者が圧倒的に罪深い組織であった。) ³⁸と言及している。決勝戦におけるオランダの暴力的なプレイに関して、国際サッカー連盟である FIFA が警告すべきという厳しい表現を用いていた。

日本、イギリスそれぞれの新聞社同士では文章の割合、表現方法に関して、差異は見られなかった。しかし、上記の例や全ての新聞を通して、日本、イギリスの両国で比較すると、日本の新聞よりもイギリスの新聞の方が、厳しい意見や否定的な見解が多く述べられているのが非常に特徴的であった。

次に B.サッカーの質に関するクリティカルな表現の記述に関しては、読売新聞で 62%、朝日新聞で 50%であるのに対して、The Times で 37%、The Guardian で 50%と日本、イギリスのすべての新聞が高い割合で、決勝戦における試合の質に関して言及されていた(グラフ 1~4 参照)。すべての新聞でサッカーの質に関するクリティカル表現が一番多かった。4紙それぞれの例を挙げると、読売新聞では、「両国とも伝統的に美しい攻撃サッカーを志向する。だが、オランダはスペインのパスを寸断するために深く引いてスペースを埋め、ファウル覚悟で激しく体を当てた。スペインが美しいサッカーを試み、オランダがそれを殺しにかかった。」³⁹と試合を分析し、決勝戦に関する総評を行っていた。朝日新聞では、「守備的なサッカーが悪いとは思わないが、スペインのような攻撃的で面白いサッカーが勝ったのはいいこと。こんなサッカーが浸透していけばいい。」⁴⁰と元日本代表の福西氏のコラムを掲載している。

³⁶ 『The Times』 2010.7.12 ワールドカップ特集第2面

³⁷ 国際サッカー連盟。南アフリカワールドカップを主催

³⁸ 『The Guardian』 2010.7.12 スポーツ第4面

³⁹ 『読売新聞』 2010.7.12 夕刊 第9面

⁴⁰ 『朝日新聞』 2010.7.12 夕刊 第9面

一方、The Times では「Great world champions do much more than just win the trophy. They make themselves immortal. They demand to be discussed every time we speak of greatness.」(偉大な世界チャンピオンは、ただトロフィーを勝ち取ること以上のことをしたのだ。彼らは自分たちを永久不滅の存在にした。我々が偉大について話すときには、いつも自分達のことを議論されるようにしたのだ。) ⁴¹と述べ、スペインの美しいサッカーは未来にも語られる存在であるという主旨を語っている。しかし、オランダのサッカーに関しては、「Had Holland won, it would have been an insult to the game and, (中略), to the proud tradition of the nation that pioneered “total football” and produced player such as Cruyff, Neeskens, Gullit, Van Basten and Bergkamp.」(もしオランダが勝利していたら、それはその試合への侮辱、(中略)さらにはトータルフットボールを開拓し、クライフ、ニースケンス、フリット、ファンバステン、ベルカンプといった選手を生み出した国の誇りある伝統への侮辱であるのだ。) ⁴²と述べられている。オランダの伝統的な美しいサッカーを放棄したオランダの選手達に厳しい言葉が表現されている。さらに、「It called to mind Arjen Robben’s statement on Friday that he would “prefer to win a very ugly game than to lose a beautiful game”. Little did we know at the time just how ugly Holland were prepared to make it.」(それは、アリエンロッベンが美しい試合で負けるよりも、醜い試合で勝つ方が好きだと金曜日に述べたことを思い出させる。と同時に、オランダがどれほど醜くなるように準備したのか我々は決して知る由もない。) ⁴³と表現され、決勝戦でのオランダが守備的なサッカーを「醜い」と表現している。一方で The Times の他の記事では、オランダの守備的なプレイに関して肯定するような表現もある。「Don’t trash our players. Holland played with true teamwork.」(我々の選手を批判してはいけない。オランダは真のチームワークでプレイしたのだ。)⁴⁴「They played as a team, a real well-drilled team, where success is measured in team results, not individual performance.」(オランダは真に訓練されたチームとしてプレイし、そこでは、成功は個人のパフォーマンスではなくチームの結果としてはかられるのだ。) ⁴⁴といった表現が用いられ、オランダがチームとして規律ある組織で戦い、準優勝した結果は褒められるべきという主旨の表現が述べられ、オランダプレイへの否定的な見方に関して反論する表現もある。

The Guardian では、「systems were strangling the match – particularly the system of defence devised by Bert van Marwijk. Even there is was possible to admire , in a detached kind of way,” the intensity with which the Dutchmen flew into their interceptions.

⁴¹ 『The Times』 2010.7.12 ワールドカップ特集 第4面
⁴² 『The Times』 2010.7.12 ワールドカップ特集 第2面
⁴³ 『The Times』 2010.7.12 ワールドカップ特集 第2面
⁴⁴ 『The Times』 2010.7.12 ワールドカップ特集 第10面

Defending well is as much a part of the game as scoring goals, but if ever there was a final to lend credibility to the concept of anti-football, this was it.」(システムは試合を押さえつけた。特にファンマルバイクによって組織されたディフェンスのシステムである。強烈さをもって、インターセプトに集中する孤立したような方法は称賛される可能性もあったかもしれない。良いディフェンスはゴールを奪うことと同様に試合の重要な部分を占めるが、それはもしアンチフットボールの考え方に信頼を与える決勝であったならばの話である。) 45とオランダのサッカーはアンチフットボールであったという主旨の表現がなされていた。一方で「It would still be a misrepresentation to state that Holland devoted themselves entirely to wrong-doing」(オランダが自分たちを完全に間違った方法に捧げたといえるのは、間違いであるだろう。) 46といった意見も見られ、オランダへの否定的な表現を和らげるような表現も用いられている。イギリスの新聞では、スペインの美しいサッカーへの称賛に加え、オランダのアンチフットボールに関するクリティカルな表現が多く使われていた。

B.サッカーの質のタイプに関して言えることは、上記の例や全ての新聞を通して、スペインの美しいサッカーに関して、称賛を表現している点、オランダのアンチフットボールに関するクリティカルな表現が多いという点は4紙すべてに共通している。しかし、表現の仕方で違いがあり、日本の新聞が、試合の総評として分析する表現が多いのに対して、イギリスの新聞では、皮肉、否定、意見などが述べられ、読者に投げかけるような表現が非常に多かった。またイギリスの新聞社同士でも差異が見られ、*The Times* では、オランダの暴力的なプレイへの否定的意見、肯定的意見の両方が述べられていたのに対して、*The Guardian* も、上記の例のように、オランダへの否定的な表現を和らげるような表現も用いられていたのだが、オランダのプレイを肯定するような表現は見られなかった。

C.選手のプレイに関するクリティカルな表現の記述に関しては、読売新聞で28%、朝日新聞で44%であるのに対して、*The Times* で25%、*The Guardian* で24%と日本の朝日新聞の割合が高く、他の新聞は同じような割合であった(グラフ1~4参照)。4紙それぞれの例を挙げると、読売新聞では、主将としてチームを引っ張ったカシージャス47を「神がかり的セーブ」「無敵艦隊の守り神」48と表現し、プレイに関しては「攻撃陣が得点力不足の中、決勝トーナメント4試合すべて1-0の勝利に貢献した。パラグアイ戦はPK、ドイツ戦では至近距離で放たれたクロースのボレーを止めるなど、獅子奮迅の活躍だった。」49と述べられていた。意外にもイニエスタ

45 『*The Guardian*』 2010.7.12 スポーツ第2面

46 『*The Guardian*』 2010.7.12 スポーツ第4面

47 スペイン人選手。主将として、優勝カップを掲げた。

48 『読売新聞』 2010.7.12 夕刊 第9面

49 『読売新聞』 2010.7.12 夕刊 第9面

に関するクリティカル表現はあまり多くなく、MVP に選ばれたウルグアイのフォルラン⁵⁰に関する表現も見られた。

朝日新聞では、決勝ゴールを挙げたイニエスタに関する表現が中心で、「攻撃のアクセントになり続けた。」「機械仕掛けにも思える正確なスペインのパスワークは、時に無味乾燥に陥りがち。そこに良くも悪くも意外性のスパイスをふりかけてきた。」⁵¹と表現し、イニエスタのプレイを分析しながら、決勝戦におけるスペインのサッカーを振り返っていた。

The Times では、「Iñesta deserves more than the gratitude of a nation.」（イニエスタは祖国からの感謝以上の存在に値する。）⁵²と述べ、イニエスタのプレイがスペインの優勝に導き、さらには、イニエスタの素晴らしいプレイによって、醜いプレイをしたオランダが優勝するのを避けられたという点でも称賛している。こういった称賛だけではなく、決勝戦に出場したスペイン、オランダの選手全員に対しての採点や評価のコメントが掲載され、一人一人の選手を分析した表現が多かった。⁵³

The Guardian では、イニエスタのプレイへの称賛に加えて、オランダの選手であるファンボメルやデヨングに関して、「They were poor imitations of Claude Makelele, the former French World Cup winner and the finest exponent of the art of breaking up play and initiating attacks.」（彼らは、フランスワールドカップの優勝者であり、相手の攻撃を摘み、攻撃を始める熟練の技を持つ最高の代表例であるマケレレの単なるまねごとだ。）⁵⁴と分析し、プレイ面に関する2人の評価は低かった。The Times と同様に、決勝戦に出場したスペイン、オランダの選手全員に対して採点や評価のコメントが掲載され、一人一人の選手を分析した表現が多かった。⁵⁵

上記の例や全体を通して、C.選手のプレイに関するクリティカルな表現の記述に関しては、4紙すべての新聞で、決勝点のゴールを挙げたイニエスタや、素晴らしいセービングを披露したカシージャスを称賛するような表現や選手、両監督の采配を分析したような表現が多かった。相違点としては、イギリスの新聞がオランダの選手のプレイに関して否定的なイメージを表現しているのに対して、日本の新聞では、そのような表現は見られなかった。選手個人のプレイに関するマイナスイメージ表現は、日本の新聞ではほとんど掲載されていなかった。

D.選手の個人的動機に関するクリティカルな表現の記述に関しては、The Times で2%の割合で取り上げられているだけで、他の3紙では、取り上げられていなかった（グラフ1~4参照）。

⁵⁰ ウルグアイの選手。南アフリカワールドカップのMVPを受賞した。

⁵¹ 『朝日新聞』 2010.7.12 夕刊 第8面

⁵² 『The Times』 2010.7.12 ワールドカップ特集 第10面

⁵³ 『The Times』 2010.7.12 ワールドカップ特集第4、5面

⁵⁴ 『The Guardian』 2010.7.12 スポーツ第6面

⁵⁵ 『The Guardian』 2010.7.12 スポーツ第5面

The Times では、「Andres Iniesta will be in no doubt that the caution he collected from Howard Webb, the referee, for removing his shirt in celebration of the goal that won the World Cup was worth it.」（イニエスタがワールドカップを勝ち取るゴールを祝い、シャツを脱いだために、主審のウェブから貰ったイエローカードは、疑いなく価値のあるものである。）⁵⁶と表現され、26 才の若さで亡くなった、サッカー選手である親友のダニハルケに対して見せたシャツのメッセージは非常に価値のあるものだったと分析している。The Times 以外の他の新聞でも、イニエスタがユニフォームを脱ぎ、ダニハルケに対してメッセージを捧げたことに関する記事は存在したが、主観的な表現ではなく、事実報道であり、クリティカルな表現としては抽出しなかった。

E.審判、レフリングの記述に関しては、読売新聞で 2%、朝日新聞で 0%であるのに対して、The Times で 20%、The Guardian で 13%と日本とイギリスの新聞では大きく差が出た（グラフ 1~4 参照）。決勝戦の主審を担当したハワードウェブがイギリス出身ということもあり、イギリスでは E タイプのクリティカル表現が多く使われていた。それぞれの例を挙げると、読売新聞では、「国際サッカー連盟は今大会、技術のある選手を危険な反則から守ろうというレフリングを促していたように感じるが、その方針もスペインには有利に働いたと思う。」⁵⁷と表現された一文のみであり、ハワードウェブが下した判定の是非に関する表現ではなかった。

The Times では、第 6、7 面にハワードウェブが下した判定の全てが記載され、試合開始から終了までの判定を振り返っている。その中でハワードウェブが下した個々の判定に対して、「Right call.」「Right decision」「Correct yellow」「Good call.」⁵⁸といった表現が用いられ、判定の是非が 2 ページに渡って行われていた。

一方の The Guardian では第 3 面にハワードウェブの判定に関して記事が掲載されている。その中で「Webb's dream gig descends into the job from hell」（ウェブの夢のような仕事は地獄からの仕事に成り下がった。）⁵⁹という見出しが付けられ、今回の決勝戦の審判を裁くのは「mission impossible」と表現され、荒れた決勝戦の審判をするのはいかに厳しいものであったのかを表現している。さらに、試合の中で、ハワードウェブを「helpless」（役たたず）と表現し、ハワードウェブが試合をコントロールできなかったと表現している。

決勝を担当したハワードウェブがイギリス出身ということもあり、イギリスでは非常に高い割合で E タイプのクリティカルな表現が見られたが、決勝の主審に対する意見や分析が見られたのは、イギリスの新聞において非常に特徴的な点であった。

⁵⁶ 『The Times』 2010.7.12 ワールドカップ特集 第 5 面

⁵⁷ 『読売新聞』 2010.7.12 夕刊 第 8 面

⁵⁸ 『The Times』 2010.7.12 ワールドカップ特集 第 6 面

⁵⁹ 『The Guardian』 2010.7.12 スポーツ第 3 面

グラフ 1~4 のように、F.サポーターに関するクリティカルな表現は全ての新聞で言及されていない。また G その他に関するクリティカル表現も、読売新聞が今後の日本代表がどのように戦っていくべきなのかについて、記述しているのと、The Times において、今回のワールドカップ開催の治安面に関して分析している表現が見られただけであった。

以上のように、カテゴリ分析では、日本、イギリスのサッカー試合に関する新聞報道において、差異が見られる。スポーツにおけるフェアプレイ精神に関するクリティカル表現 (A タイプ) は、日本よりもイギリスの新聞の方がより多く言及している。「暴力的プレイに関するクリティカルな表現の割合が日本とイギリスでは異なると考える」という上記の仮説⁶⁰を実証することができた。さらに、上記の例⁶¹のように、オランダ選手の暴力的なプレイに関して、日本よりもイギリスの新聞の方が、厳しい意見や否定的な見解が述べられている点が、特徴的な差異であった。また、決勝戦に関する評価や試合の質に関して、言及しているクリティカル表現 (B タイプ) は、The Times だけが他の新聞よりも少し割合が低かったのだが⁶²、日本、イギリスすべての新聞において、一番高い割合で言及されている。上記⁶³の「決勝という全世界が注目する試合の質に注目するのは両国の新聞の共通点である。」という仮説も実証することができた。さらに、決勝戦の審判に関して言及しているクリティカル表現 (タイプ E) では、日本よりもイギリスの新聞で多く言及され、決勝の審判ハワードウェブが下した判定の是非を表現する文章が多い。

5.2.2 イメージ分析

クリティカルな文章として抽出した文章に関するイメージ分析を行った。抽出したクリティカルな文章が選手やチームを称賛するプラスイメージなのか、あるいは主観的な表現が含まれず、決勝戦のデータや状況を踏まえた上で分析したノーマルイメージなのか、選手、チームに対して否定的な意見や考察、皮肉を述べるマイナスイメージなのか。それぞれの新聞で分析調査を行った。注意点としては、一文中にプラスイメージとマイナスイメージが両方含まれる場合は、プラス、マイナス両方のイメージでカウントした。また、主観的な表現が含まれない場合でも、前後の文脈によってそれぞれのイメージを判断した。以下のグラフ 5~8 が各新聞社のそれぞれのイメージの割合を示したものである。さらに、各新聞社で使われているプラスイメージ、ノーマルイメージ、マイナスイメージの表現を抽出し、その代表例が以下の表 3~5 の通りである。

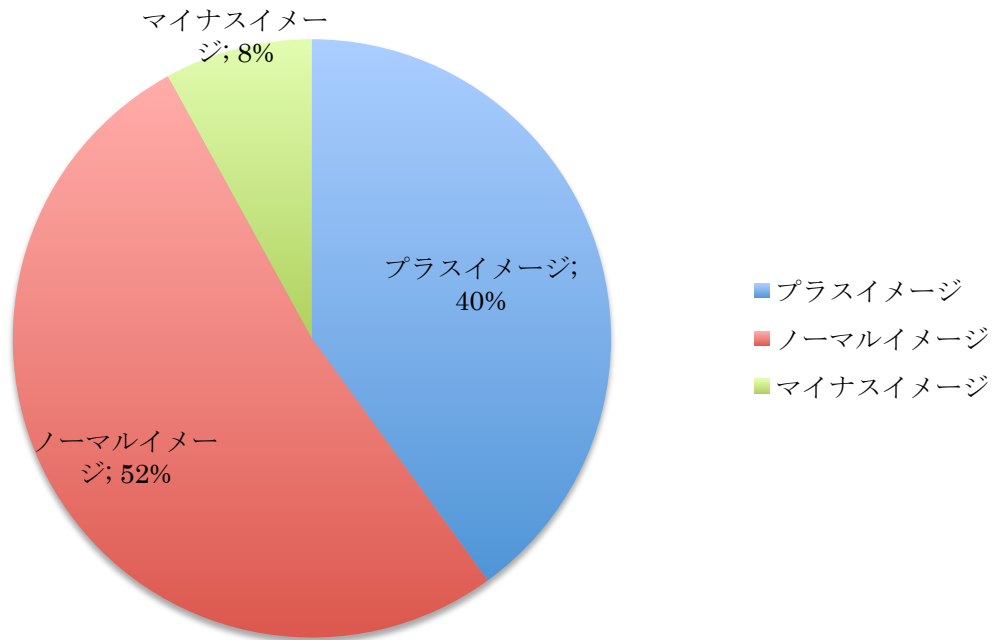
⁶⁰ p.7-8

⁶¹ p.15-16

⁶² グラフ 1-4 参照 読売新聞 62%、朝日新聞 50%、The Times37%、The Guardian50%

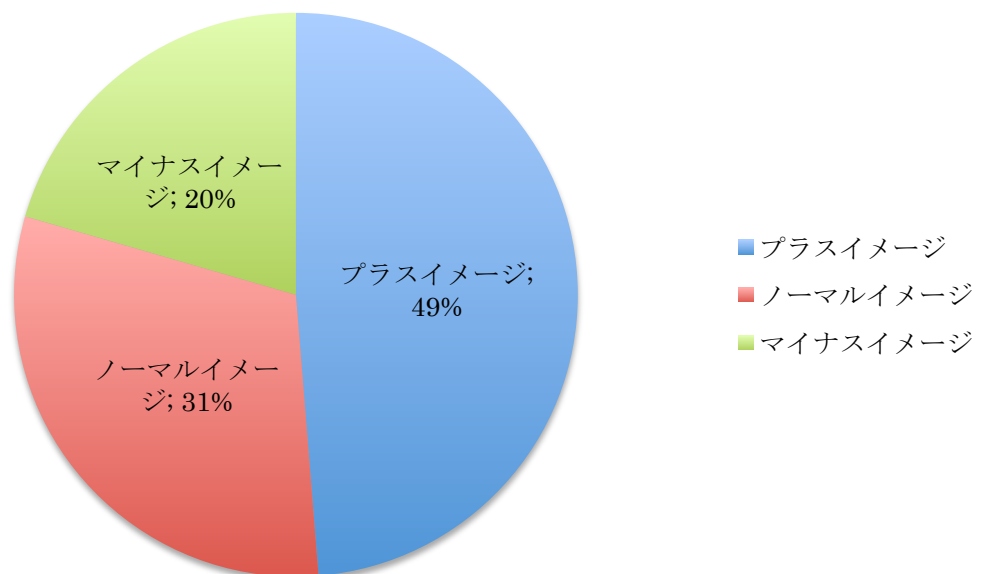
⁶³ p.7-8

読売新聞



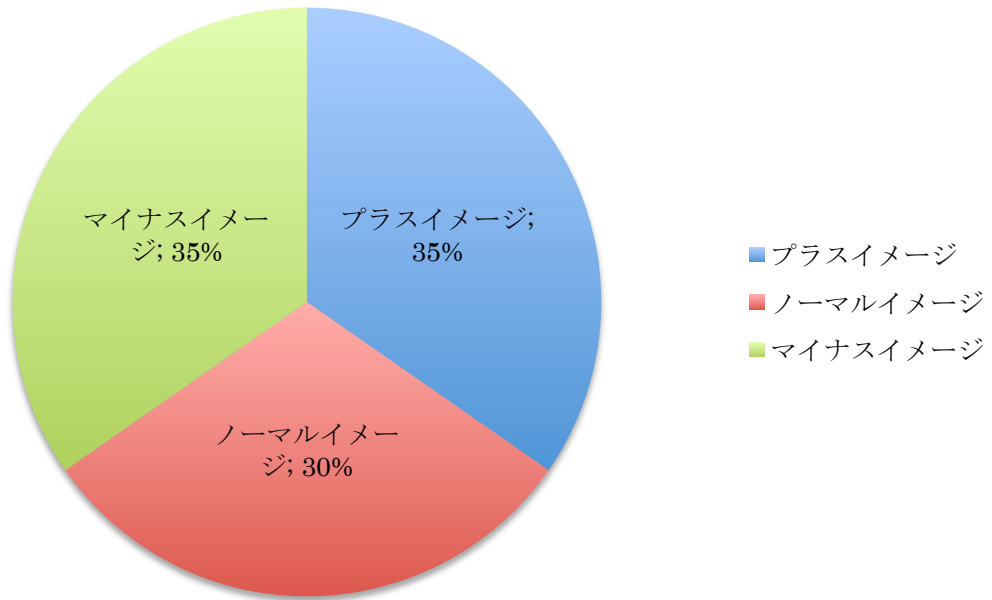
グラフ 5 [イメージ分析結果:読売新聞]

朝日新聞



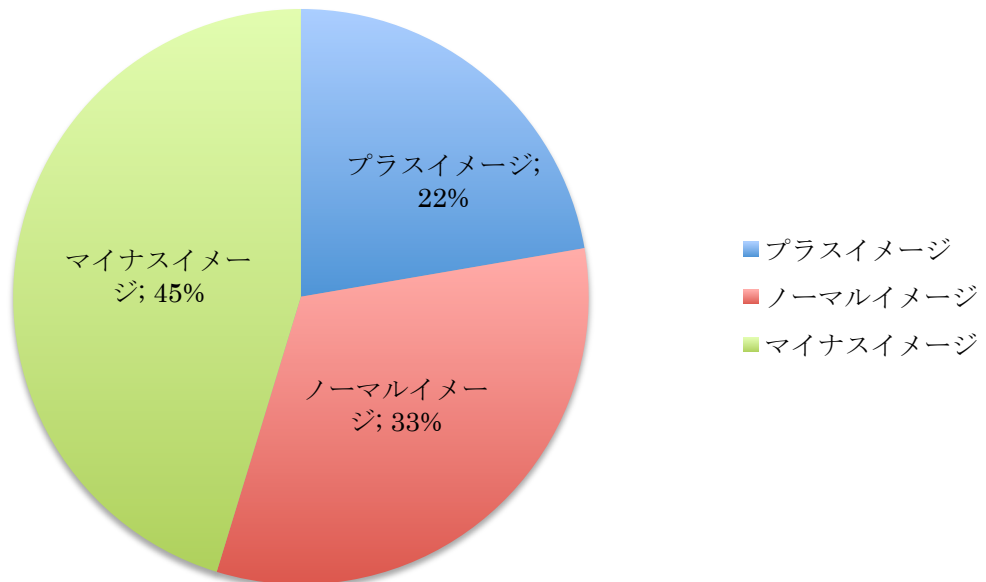
グラフ 6 [イメージ分析結果:朝日新聞]

The Times



グラフ 7 [イメージ分析結果:The Times]

The Guardian



グラフ 8 [イメージ分析結果: The Guardian]

読売新聞	<p>「決勝にふさわしい素晴らしい試合だった」</p> <p>「デルボスケ監督には試合の流れを読む力があつたし、起用に応えられる選手がたくさんいる選手層の厚さも大したものだ」⁶⁴</p>
朝日新聞	<p>スペインのサッカーに関して「無敵 パスの極致」⁶⁵</p>
The Times	<p>「It has been a long wait for such a serious football nation to reach the pinnacle of the sport, but they can be proud to have scaled the peak with a rare generation of players who value aesthetics almost as much as they cherished the gleaming golden trophy that was in their hands last night.」</p> <p>(そのような熱心なサッカー大国が、頂点に達するまでに長い時間かかったが、昨晚彼らが手に収めた光り輝く金色のトロフィーを大事にしているのと同じように、美学に価値を置く希少な選手とともに頂点に登り詰めたことは、称賛されるだろう。)⁶⁶</p> <p>「Great world champions do much more than just win the trophy. They make themselves immortal. They demand to be discussed every time we speak of greatness. Spain did not win this final as they would have wanted to, but history will put them up among the best all the same.」(偉大な世界チャンピオンは、ただトロフィーを勝ち取ること以上のことをしたのだ。彼らは自分たちを永久不滅の存在にした。我々が偉大について話すときには、いつも自分達のことが議論されるようにしたのだ。スペインは彼らが望むように決勝を勝利したわけではなかったが、歴史は彼らを歴代最高のチームとして刻まれるだろう)⁶⁷</p>
The Guardian	<p>「However, this should not mask the overall contribution of Spain during the tournament. There is no question that the clever football, which involves interchanging of movement, people running off the ball and incisive passing, all of which has been the hallmark of Spain in the last couple of seasons, deserved to win football's greatest prize.」</p> <p>(しかしながら、これはトーナメントにおけるスペインのすべての貢献を隠すものではない。お互いに動き合い、ボールのないところで走り、鋭いパスを出</p>

⁶⁴ 『読売新聞』 2010.7.12 夕刊 第8面

⁶⁵ 『朝日新聞』 2010.7.12 夕刊 第8面

⁶⁶ 『The Times』 2010.7.12 ワールドカップ特集 第5面

⁶⁷ 『The Times』 2010.7.12 ワールドカップ特集第5面

⁶⁸ 『The Guardian』 2010.7.12 スポーツ第6面

	す、これらすべてがスペインの特徴である、賢いフットボールが最も偉大な賞を勝ち取るに値したことは、間違いないのだ) 68
--	---

表 3 「各新聞社のプラスイメージ表現の例」

読売新聞	「日本サッカー協会も、今大会をきちんと総括して、独自のスタイルを確立すべく、人づくりから取り組んでほしい」 69
朝日新聞	試合内容に関して「支配率 57%。それが基盤にあるから選手交代でじりじりとペースをたぐり寄せた」 70
The Times	「Holland are the first team in World Cup history to have eight different players receive a yellow card in the same game. 」(オランダはワールドカップ決勝で 8 人の異なる選手がイエローカードをもらった歴史上はじめてのチームである) 71
The Guardian	「The tactics of holding Van Bommel and De Jong to protect the centre of defence, together with the tough challenges that followed , led to a fractured game that upset the Spanish rhythm and gave the favourites few goalscoring opportunities.」 (ファンボメルやデヨングが中央のディフェンスを守り、厳しくチャレンジしていく戦術は、スペインのリズムを乱し、ゴールの絶好の機会をほとんど与えず、激しい試合に導いた) 72

表 4 「各新聞社のノーマルイメージ表現の例」

読売新聞	「世界に大きな影響を与えたオランダサッカーだが、優勝という結果を得られなかった今大会で、一体何を残したのだろうか。」 73
朝日新聞	スペインのビジャ ⁷⁴ に対して「重圧からか動きに本来の切れがない。」「十二分にチームに貢献したものの、決勝での印象は薄かった。」 75

69 『読売新聞』 2010.7.12 第 8 面

70 『朝日新聞』 2010.7.12 第 8 面

71 『The Times』 ワールドカップ特集 2010.7.12 第 7 面

72 『The Guardian』 スポーツ 2010.7.12 第 6 面

73 『読売新聞』 2010.7.12 夕刊 第 8 面

74 スペイン人選手。予選から決勝まで 5 得点を挙げ、決勝戦でのプレイを期待されていた。

75 『朝日新聞』 2010.7.12 夕刊 第 8 面

The Times	<p>「However, had this final ended with anything but a Spain victory, the damage to the sport's image might have been far greater.」</p> <p>(しかしながら、この決勝がスペインの勝利に終わらなかったとしても、スポーツのイメージへのダメージは非常に大きいものだったであろう。) ⁷⁶</p> <p>「Shamed Holland blame Webb」</p> <p>(恥ずべきオランダはウェブを責めた。) ⁷⁷</p>
The Guardian	<p>It was a shame that the final game on the ultimate stage was riddled with so many free-kicks and stagnant play.</p> <p>「最後の舞台である決勝が、多くのフリーキックや停滞させるプレイに時間が割かれたのは恥ずべきことであった。」 ⁷⁸</p>

表 5 [各新聞社のマイナスイメージ表現の例]

読売新聞は、グラフ 5 のように、プラスイメージが 40%、ノーマルイメージが 52%、マイナスイメージが 8%という結果で、マイナスイメージである否定的な意見や考察が非常に少なかった。表 5 の例や新聞全体を通して、The Times や The Guardian で取り上げられていた、オランダの選手の暴力プレイや、決勝戦で多くのファウルや警告が出されたことに関する、否定的な意見や考察が、ほとんど言及されていない点が特徴的であった。また、「うまい選手に対しては、距離を詰めて守るのがサッカーの鉄則で、オランダは体の強さも生かし、そういう守備をすることで、スペインの良さを消した」⁷⁹というような、試合の分析をしたノーマルイメージ表現の割合が一番多く、表 4 の例のように、日本サッカーの将来に言及している表現もあった。

朝日新聞は、グラフ 6 のように、プラスイメージが 49%、ノーマルイメージが 31%、マイナスイメージが 20%という結果で、読売新聞よりはマイナスイメージの表現が多かった。表 5 の例や新聞全体を通して、朝日新聞同様に、オランダの選手の暴力プレイや決勝戦で多くのファウルや警告が出されたことに関する、否定的な意見や考察がほとんど言及されていなかった。

日本の新聞においては、朝日新聞が、読売新聞に比べて、プラスイメージやマイナスイメージ表現の割合が多く、より読者に意見をぶつけ、語りかける傾向にあると言えるだろう。一方の読売新聞は、否定的表現であるマイナスイメージの割合が少なく、朝日新聞に比べより保守的な傾向が見られた。もちろん 7 月 12 日の夕刊の記事だけで、判断し結論付けることはできないが、同じ国の新聞社でも差異が存在し、両新聞社の傾向を見ることができた。

⁷⁶ 『The Times』 2010.7.12 ワールドカップ特集 第 2 面

⁷⁷ 『The Times』 2010.7.12 ワールドカップ特集 第 1 面

⁷⁸ 『The Guardian』 2010.7.12 スポーツ第 6 面

⁷⁹ 『読売新聞』 2010.7.12 夕刊 第 8 面

The Times は、グラフ 7 のようにプラスイメージが 35%、ノーマルイメージが 30%、マイナスイメージが 35%という結果で、3 つのイメージがほぼ同じような割合であった。一方の The Guardian は、グラフ 8 のようにプラスイメージが 22%、ノーマルイメージが 33%、マイナスイメージが 45%という結果で、マイナスイメージの割合が多かった。

イギリスの新聞においては、The Times に比べて、The Guardianの方が、マイナスイメージ表現の割合が多く、より否定的な表現を好む傾向にある。もちろん日本の新聞と同様に、7月12日の記事だけで、判断し結論付けることはできないが、同じ国の新聞社でも差異が存在し、両新聞社の傾向を見ることができた。

日本の両新聞では、プラスイメージやノーマルイメージの表現が多く、「日本の新聞が試合の客観的な記述さらには、選手に対する称賛などが多い」という上記の仮説⁸⁰を実証することができた。また、オランダの暴力的プレイに関して否定的表現を用いるマイナスイメージ表現はほとんど言及されていなかった。一方イギリスの両新聞においては、The Times では、マイナスイメージ表現の割合が、プラスイメージ表現と同じ割合で、一番多かった。The Guardian では、マイナスイメージが 45%という割合で一番多く、「イギリスの新聞では、否定的なマイナスイメージを持つクリティカルな表現が多いのでははないか」⁸¹という仮説を実証することができた。注意すべき点としては、日本と同様に、イギリスの新聞でも、クリティカルな表現の多くが、否定や称賛だけを表現しているのではなく、決勝戦に関して、客観的に分析する表現も多かった。

⁸⁰ p.7、8 に記述

⁸¹ p.8 に記述

6. 考察

本研究を通して、日本、イギリスのサッカー試合に関する新聞報道の差異を実証することできた。カテゴライズ分析では、決勝戦に関する評価や試合の質（Bタイプ）に関するクリティカル表現は、日本、イギリスのすべての新聞において、一番高い割合で言及されている。こうした共通点もあったが、スポーツにおけるフェアプレイ精神（Aタイプ）や、決勝戦の審判（タイプE）に関するクリティカル表現は、日本の両新聞よりも、イギリスの両新聞の方が多く言及されていた。

こうした差異は、日本とイギリスのサッカーというスポーツへの意識の差があるからこそ生じ、サッカーというスポーツがより国民に近い位置にあるのは、イギリスであると考えた。だからこそ、カテゴライズ分析で差異が見られたように、イギリスの新聞では、様々な角度、切り口で報道され、国民をより惹き付けるような表現形態になっているのではないだろうか。上記の中村（1995）⁸²が指摘していたように、「日本がサッカーを『見る』ことに注目しているのに対して、イギリスはサッカーを『する』ことに注目しているのではないか。」つまり、日本の両新聞が、南アフリカワールドカップを正確に報道し、読者と同じような観戦という視点で報道していたのに対して、イギリスの両新聞では、サッカーをすること自体に価値を置き、サッカーというスポーツ向上に少しでも貢献しようとする姿勢が記事に表れ、報道されていたと考える。日本の両新聞が、称賛などのプラスイメージやノーマルイメージが多いのに対して、イギリスの両新聞が、提言や意見などのマイナスイメージが多いのも、そういった一因があるからであろう。

日本の両新聞では、客観的分析や称賛の表現が多く使われ、マイナスイメージ表現が少なかった。一方イギリスの両新聞では、日本と同様に客観的分析も多く存在するのだが、主観的表現が含まれた否定的意見であるマイナスイメージ表現が一番多かった。こうした差異は、日本の両新聞に比べて、イギリスの両新聞の方が、より国民に意見をぶつけ、語りかけることで、読者を惹き付ける傾向にあるため、生じたのであると考える。イメージ分析の結果に差異が生じたのは、こうした両国のメディアの位置付けが違うことが要因の一つである。

なぜ日本とイギリスでは、メディアの位置付けに差異がみられるのだろうか。そうした差異が生まれる要因の一つに、本研究のテキスト分析で取り上げた、クリティカルに物事を考える姿勢が、どれだけ国民に受け入れられているかが挙げられると思う。上記の先行研究⁸³で指摘したように、日本人の価値観として、「意見の発信が苦手であり、周りとの『空気感』を大切にする」「論理的、客観的に物事を捉え、それを周りに発信することが苦手である」つまり、人と違

⁸² 中村 敏雄『スポーツ文化論シリーズ④ スポーツメディアの見方、考え方』（有限会社創文企画 1995年7月）より引用。

⁸³ P.5-7

うことが嫌悪され、周りとの同質性や同調性が、日本では重要視されている。一方、イギリス人の価値観として、物事を分析的、主観的に処理する傾向があり、意見を対立させることもいとわれない。自分と周りが違う意見であっても、自らの分析や主観に従って、行動することが大切であるとされている。イギリスの方がよりクリティカルに物事を考え、意見を発信する傾向にあるのだ。実際に、イギリスの新聞は、「内容が保守的だと新聞社は潰れてしまい」⁸⁴いかに新聞社独自の意見や主張で、国民を惹き付けるのかが重要であるのだ。

もちろん、日本、イギリスのサッカー試合報道に差異が見られる要因として、新聞社同士の見解の違い、記者の意見の違いなど様々な要因が考えられるだろう。しかし、こうした国民の価値観や考え方の特徴の差異が、試合報道に差異が見られた一因として挙げられる。

スポーツメディアというのは、扱うスポーツそのものを向上させるべきという私の考えがある。日本のスポーツメディアがどのように報道するのが適切なのかは、議論の余地がある。今後、そうしたスポーツメディアの在り方に関する議論を再考する研究として、本研究は有用であるのだ。

7. 今後の展望

本研究において、研究対象としたすべての新聞は、2010年の7月12日の記事の1日分であり、今後はさらに多くの記事を対象とする必要がある。さらに、今回テキスト分析として、日本、イギリスの両新聞のクリティカル表現を比較したが、両者の図や写真のデータも比較できれば、新たな差異を検証することができた。

また、日本、イギリスの報道の在り方に差異が生じる要因として、両国の価値観を取り上げたが、もちろんすべての国民に共通する日本的価値観、イギリス的価値観を定義付けすることはできない。一人一人の考え方が千差万別である以上、当然のことである。しかし、日本、イギリスの報道の在り方に差異が生じた以上、両国の価値観が関係していることは確かだ。こうした両者の価値観に関する調査も、今後さらに研究する必要がある。

本研究は、スポーツメディアの在り方に関する議論を再考する研究として、位置付けられる。最終的には、本研究を踏まえ、日本のスポーツメディアはどのような報道形態を取るべきなのかについて、研究していきたい。

⁸⁴ 英国で新聞を読むための基礎知識

<http://www.news-digest.co.uk/news/features/567.html> 参照

8. 参考文献

今西 恭子 (2006 年 9 月) 「スポーツ記事にあらわれる主観性―日豪の新聞記事の比較を通して―」 時事英語学研究 日本時事英語学会 [編] 掲載号 45 p.15～28.

木崎 伸也 (2010 年 7 月) 『世界は日本サッカーをどう報じたか』 ベストセラーズ.

楠見 孝、子安 増生、道田 泰司 編 江草 卓治 発行 (2011 年 9 月) 『批判的思考力を育む 学術力と社会人基盤力の基礎形成』 株式会社 有斐閣.

小泉博一、飯田操、桂山康司編 (2004 年 9 月) 『イギリス文化を学ぶ人のために』 世界思想社.

T.モリスン、W.A.コナウェイ、G.A.ポータン著 幾島 幸子訳 (1999 年 10 月) 『世界 60 カ国 比較文化事典』 マクミラン ランゲージハウス.

中村 敏雄 (1995 年 7 月) 『スポーツ文化論シリーズ④ スポーツメディアの見方、考え方』 有限会社創文企画.

東明有美 入口 豊 山科花恵 松原英輝 株式会社 電通 保健体育教育講座 修士課程保健体育専攻 (2003 年 2 月) 『女子サッカーの日米比較研究：日本女子サッカーの歴史と現状について』 大阪教育大学紀要 第 IV 部門 第 51 巻 第 2 号 p.433～451.

橋本 純一編 (2002 年 12 月) 『現代メディアスポーツ論』 世界思想社.

原聰 (2013 年 2 月) 『日本人の価値観：異文化理解の基礎を築く』 かまくら春秋社.

英国で新聞を読むための基礎知識

<http://www.news-digest.co.uk/news/features/567.html> (2013 年 11 月 22 日閲覧)

守備重視のトレンドの中で更に高まる攻撃の重要性

http://sportsnews.blog.ocn.ne.jp/column/others100721_1_1.html (2013 年 12 月 20 日閲覧)

読売新聞広告ガイド

日本 ABC 協会 「新聞発行社レポート 半期・普及率」 2013 年 1 月～6 月平均 参照

<http://adv.yomiuri.co.jp/yomiuri/busu/busu01.html> (2014 年 1 月 3 日閲覧)

『朝日新聞』 2010.7.12 夕刊 第 1、7～9、14 面

『毎日新聞』 2010.7.12 夕刊 第 9、11 面

『読売新聞』 2010.7.12 夕刊 第 1、8、9、17、19 面

『The Guardian』 2010.7.12 第 1～3 面 スポーツ 1～7 面

『The Times』 2010.7.12 第 2 面 ワールドカップ特集記事 1～7、9～11 面